「ベンチャー起業によせて」(1) ―小心者たれ―

福川 清史(1979 年 4 月～1981 年 3 月 研究生)

当時、東洋醸造㈱(現・旭化成ファーマ)から研究生として、薬品有機化学講座 上田亨 教授のところで2年間お世話になった。東洋醸造で発見されたヌクレオシド系抗生物質であるブレディニンとネプラノシン A(図)の化学的改変という研究での指導を受けた。

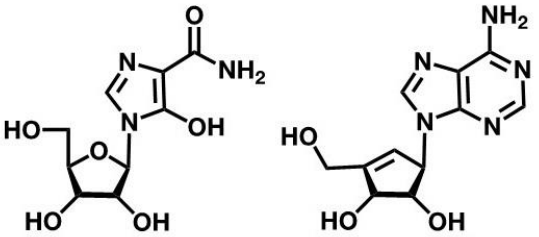
上田先生には学生同様に扱って頂き、研究に、野球に、コンパに、と楽しく充実した2年間を過ごさせて頂いたと今でも感謝している。その頃卒研生、修士だった方々とは今でも親交を重ねており、懐かしい日々を語ったり、近況を語ったりの楽しい時間を過ごしている。

帰社後、再び東洋醸造の研究所で研究生活を送るも、国際事業部への異動があり、それまでの研究生活とは全く違う、ビジネスの世界で働くことになった。海外製薬会社とのライセンス交渉、果ては海外子会社の設立、運営、欧州駐在と、多くの経験をし、帰国後に一念発起し自らの会社を設立するに至った。ベンチャーとして製薬会社(処方箋薬の製造販売承認を申請・取得できる第一種医薬品製造販売業)を起業、実際に臨床開発、製造販売承認を取得、販売開始に成功、その後、現在は別の会社としてコンサルティング企業を運営するに至っている。

このところ、大学発のベンチャーが盛んであるが、私自身後期高齢者という老境に入り、これまでの経験を語ることで、大学発のベンチャー運営に何かお役に立てないかと思いこの ESSAY を書かせて頂くこととした。

その1、としてベンチャー運営は「**小心者たれ**」という所感を述べたい。

起業時には「事業計画書」なるものを作成し、自己資金なり他からの出資金を元に運営することになる。資本金、出資金として初期にそれなりの多額の現金が集まるので、気持ちも大きくなってしまう。とこ



ブレディニン　　ネプラノシンA

ろが R&D 型のベンチャー(これが多いと思うが)はお金が出て行く一方なのである。また事業計画書は元々楽天的観点から作成しているので、収入もない状況ではあっという間に資金が底をついてしまう。財務諸表は 3 つから成り立っており、損益計算書、貸借対照表、キャッシュフローを読んで、経営状態を見ることになる。どれも大事な数字であるが、私は「**キャッシュフロー**」に重きを置くべきと考えている。極端な言い方をすると、**5 年後の○億円より、明日の 100 円の収入が大事**、ということである。明日の従業員の給与、家賃や電気代をどうやって支払うか。私自身はしょっちゅう銀行通帳の残高をチェックしていた。

チェックしていても出て行くものは出て行く。R&D 型ベンチャーは研究・開発経費の引き算一方なので、ここに足し算ができる事業として即金の期待できるコンサルティングや分析業務受託などを織り交ぜて、少しでも引き算の度合いを減らすことにも頭と汗を流した。これは一部のアイデアではあるが、何か少しでも収入を期待できる業務を織り交ぜることをお勧めしたい。

次回以降は、(2)情報力、(3)ネットワーク、(4)バランス感覚・戦略の必要性・出口の明確化、(5)失敗から学ぶ、という表題で続けたい。

同窓会 HP:2023 年 4 月 21 日公開